

# 硬式野球部

設 立	1940年(1期生が設立)
部 長	松林 伸生(管理工学科)
現在の部員数	56人(2013年7月現在)
OB/OG 会代表者	宮永 富士男
OB/OG 会会員数	598人
U R L	<a href="http://rikotai.yukishigure.com/">http://rikotai.yukishigure.com/</a>

## はじめに

硬式野球部は硬式野球を愛する集団として、知力に加え、体力と精神力、集中力および団結力と統率力を養い、さらには、先輩・同僚・後輩を通して親交を深めることを主目的とする。同時に他大学との交友も広めていく。

## 創部当時の思い出

### 藤原工大野球部創設

1939年1期生有志で創部の準備を進め、翌年2期生の有志を加え多くの方々の助言助力をいただき、1940年正式に創部された。当時の活動では全てが手探りであった。

野球部を作る以上先ず必要になるのはユニフォーム、バット、ボール(硬球)等の用具である。

野球部の予算割当てが未だないからといって用具がなければ練習もできない。しかし用具一式を部員が各自負担で買うには高価で手に余る。

そこで慶應野球部の納入業者である、京橋の「タチカラヤ」運動具店に事情を説明し、予算獲得次第支払うことで話をつけ、各人が使用する用具一式を手に入れた。

その後で、用具を購入するための見積書を藤原工大全般の予算を取りしきる榎理事に示し、至急練習を開始したいので、是非予算を認めて欲しい旨交渉した。最初はなかなか認めてくれなかったが、どうしても認めてくれないなら部員一同が自己負担してでも買う以外なしと強硬に交渉した結果、ようやく認めてくれた。

### 新丸子王子製紙球場借用

野球用具が揃うと次に必要となるのは練習場

である。硬球なる故やたらな場所では危険が伴うため、やはり野球場として整備された場所が必要である。となると適当な場所はやたらにはない。日吉の校舎を中心とし、多摩川当りまでの間を探した結果、見つけたのが新丸子の駅(東横線)に近い王子製紙の野球場であった。

王子製紙は藤原工大創立者藤原銀次郎翁が育成した会社であり、早速王子製紙に借用交渉したところ、近くの日本医大も使用しているとのことで、日本医大と練習日がぶつからないようにすることで借用することになった。週2日位の練習日が取れたように思う。このような経緯から日本医大とは時々練習試合を行った。

また慶應野球部とも交渉し、慶應日吉球場においても慶應レギュラーメンバーと合同練習も数回行い、非常に有効であった。当時の慶應野球部は、サード宇野/ショート大館/セカンド宮崎/ファースト飯島で、戦前の黄金時代といわれた時代である。

### 小田原合宿練習

野球部の設立後、日が浅く、部員も少なく、気持ちを通じさせるため、どこかで合宿練習をしようと案を持ちより検討の結果、小田原あたりが良いということとなった。小田原への出張調査したところ、市営球場が借用可能とのことで市役所と交渉し、1940年3月15日から1週間合宿することにした。宿屋も一流の旅館と契約できた。

この球場は環境も良く、練習にはもってこいの場所であった。その後の合宿にも参加したメンバーは主将の山本徹を始め、松下マネージャー、中島勝投手(2年生)、尾崎捕手(1年生)、吉永一塁手(2年生)、豊住二塁手(1年生)、亀山三塁手(2年生)、山本遊撃手(2年生キャプテン)、佐藤利保

左翼手、松本センター、羽鳥右翼手とぎりぎりのメンバーで臨んだ。

松下が慶應大学野球部マネージャー森田氏に教を請い、ノックや夜の学習を毎日行った。その後、大日方投手に指導してもらった。

一流の大学野球部の選手が来て教えてくれるなんて、当時としては本当に大変なことであったが、それだけ藤原工大というものが慶應の学部注目浴びていたがためである。

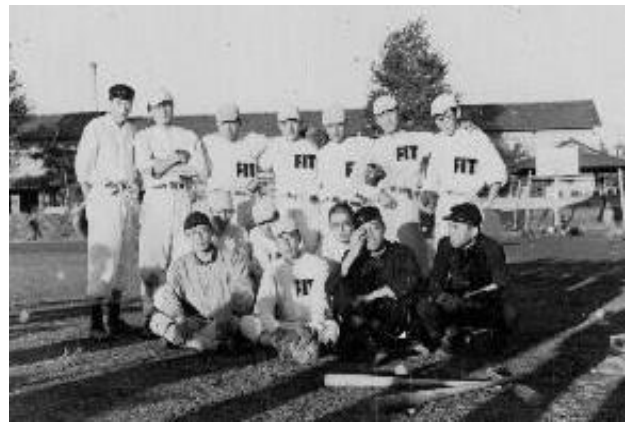
### 普段の練習

予科時代から勉強をしないと進級が難しいことで有名だったので、学期末試験が始まると練習はできなかったが、それ以外は月水金と1週間に3回は放課後、新丸子にある王子製紙のグラウンドに行って練習を自発的に行った。全員集合するとトスバッティングから、シートノックをやり、ボールが見えなくなるまで練習した。

また時々日吉にある慶應野球部のグラウンドで正選手と一緒に練習もした。その中には後年プロ野球で大活躍した別当薫や岐阜商業からきた大島投手(後に中日に入って投手として活躍した)が入りたてで、上級生から励まされて一生懸命練習していた。野球部の選手達も将来は慶應の工学部になるということ、工学部は実験や勉強が大変だということもわかっているの、大変親切に練習をみてくれた。理科系の学科は非常に頭を使い一生懸命教室で勉強した後、広いグラウンドで思う存分練習したときは本当に気分爽快で、また明日も頑張ろうと意欲が湧き上がった。

### マークのいわれ

野球部のユニフォームに藤原工大のマークをつけるのに色々と皆で議論した。大学の予科の英語の先生や、日本の中学を卒業し苦学してアメリカのスタンフォード大学とかの有名校を卒業した教員がいるので相談した。山崎先生や木村先生は、アメリカで一番有名な工科系の学校はマサチューセッツ工科大学で、MITといい、Iはinstitute、Tはtechnology、アメリカでは名がとどろいているからFITにしろ、Fujihara Institute of Technologyにしたらどうかと言ってくれた。部員へキャプテ



FIT マークのユニフォーム



第1回早稲田大学理工学部対抗野球大会  
(藤工大勝、戸塚球場)

ンの山本から話をしたところ、皆賛成してくれた。

早速黄色の下地に黒い字でFITというマークを銀座タチカラヤに注文して作った。野球のユニフォームで左胸のところにマークを貼りつけたのは当時としては非常に珍しかった。

### (1期山本敞記)

藤原工大野球部戦績	六月十日(火)晴
十六年六月四日(水)	對第一高等學校—於一高球場
開戦四時二十分、敵軍先攻、味方の應援約三百。	
第一回 劈頭兩軍無爲	第二回 敵リード、高崎の一撃!
第三回 森 松本快撃一點を先取	第四回 颯風一過第三回
第四回 敵反撥同點となる	第五回 高崎の美技、敵を阻む
第五回 龍捲虎搏のシーソーゲーム	第六回 森亂る、尾崎の負傷!
第六回 味方痛撃、再び逆轉!	第七回 敵軍痛撃、森疲勞の色濃し
第七回 ラッキーセブン恵まれず	第八回 勝誇る敵、味方の苦境!
第九回 森の健投、延長戦!	第十回 無念、涙を吞む、
第十回 兩軍健闘、雌雄決せず	我軍最後の總攻撃も松本投飛、羽鳥中
結局六—六の引分に終る。開戦六時五十五分	飛、成清四球を選んだが佐藤右飛に萬事休し十九—六で敗る。開戦時に六時三十分。
先藤原	第一高校 1 2 0 0 0 5 1 5 5
藤原工大	1 1 0 0 0 1 1 2 0 6—19
王子製紙	1 1 0 0 0 2 0 2 0
藤原工大	0 0 4 2 0 0 0 1 7—6
	A

藤原工大野球部戦績記録(1941年6月)

## 硬式野球部復活(1949年小金井)

1949年4月小金井移転時、丹羽学部長の陣頭指揮下、教職員、学生全員でグラウンドおよび設備を整えた。塾体育会小金井支部として再開され、硬式野球部は活動を再開した。翌年始まった塾内リーグ戦の戦績を以下に記す(10期濱田喜弘提供)。

		試合数	勝数	負数	勝率
優勝	丘の上倶楽部	9	7	2	0.778
第2位	パトリック倶楽部	9	6	3	0.667
第3位	工学部野球部	9	3	6	0.333
第4位	ケーニッヒ倶楽部	9	2	7	0.222

10月13日(金) パ 5 7 二 7 A 丘 ケ 8 一 8 A 工	10月27日(金) パ 1 0 二 3 工 ケ 4 一 3 丘
10月16日(月) パ 1 4 一 9 ケ 丘 8 一 6 工	10月30日(月) ケ 4 一 1 1 A パ 丘 8 一 1 0 工
10月20日(金) 丘 1 一 7 A パ 工 8 一 1 2 A ケ	11月8日(水) 丘 9 一 0 ケ 工 0 一 1 6 A パ
10月23日(月) ケ 3 一 5 A パ 工 0 一 5 A 丘	11月13日(月) ケ 0 一 1 6 A 丘 工 7 一 0 コールド パ
10月25日(水) 丘 8 一 4 1 2 A パ ケ 6 一 1 2 A 工	11月8日(水) 工 5 一 1 3 1 3 パ

投手成績(試合数3以上)

	投手	試合数	勝数	負数	勝率
1	高柳(P)	4	3	1	0.750
1	佐久間(工)	4	3	1	0.750
3	小曾根(O)	3	2	1	0.667
3	泉(O)	3	2	1	0.667
5	大洞(P)	5	3	2	0.600
6	萩本(K)	6	1	5	0.167

チーム別打撃成績

	チーム	打数	得点	安打	2塁打	3塁打	本塁打	塁打数	打点	盗塁	四死球	打撃率
1	パトリック	335	77	80	14	6	3	115	57	38	47	0.239
2	工学部	283	50	67	9	5	3	95	25	18	34	0.237
3	丘の上	237	48	51	6	5	2	73	37	9	45	0.215
4	ケーニッヒ	279	45	53	5	3	0	64	30	34	31	0.190

打撃20傑(打数21以上)

	選手	打数	安打	塁打	打点	打率
1	鈴木(P)	38	17	23	10	0.447
2	松崎(工)	26	11	15	5	0.423
3	伊豆田(K)	30	12	14	6	0.400
4	小曾根(O)	24	8	17	7	0.333
5	萩本(K)	31	10	13	5	0.323
6	高柳(P)	41	13	16	7	0.317
7	小野(O)	21	6	7	2	0.286
8	佐藤(工)	25	7	9	2	0.280
9	大野(工)	29	8	8	4	0.276
10	上岡(P)	30	8	9	1	0.267
11	安藤(P)	34	9	15	8	0.265
12	石橋(P)	34	9	11	9	0.265
13	坪井(工)	31	8	13	3	0.258
14	泉(O)	29	7	10	4	0.241
15	堀(O)	25	6	8	8	0.240
16	池井(O)	28	6	10	4	0.214
17	堀切(O)	26	5	6	4	0.192
18	星野(K)	22	4	6	3	0.182
19	村瀬(工)	22	4	6	1	0.182
20	栗田(K)	23	4	4	2	0.174
21	内田(K)	22	4	4	2	0.182
22	浜田(工)	31	5	11	4	0.161
23	大栗(O)	23	3	3	2	0.130
24	佐久間(工)	24	3	5	4	0.125
25	六角(P)	26	3	4	2	0.115
26	矢可部(P)	27	3	11	4	0.111
27	宮崎(K)	32	3	5	2	0.094
28	柴田(K)	22	2	2	2	0.091

1950年度秋季塾内対抗四クラブリーグ戦戦績表

## 1953~1956年

大学入学1年、日吉時代は教養課程の授業に明け暮れ運動することも全くなく、あたかも慶應受験時代の延長にあるようであった。

かくして2年から小金井に移り、本格的な学生生活の始まりとなった。グラウンドでは、ソフトボール、サッカー、テニスに興ずる光景が見られ、運動することに胸が弾んだ。

1954年春のある午後、5人の硬式野球部の先輩達の練習を何気なく見ていると「野球をしないか?」と声を掛けられ、大場はキャッチボールにも加わり、練習後、勧誘され2人で入部した。

その週の土曜日の試合から大場は遊撃手、入山は投手として出場となった。その日の試合とは、工学部硬式野球部と三田に拠点を置いている塾内クラブチーム(ケーニッヒ、丘の上、パトリック、エマノン)で結成している塾内リーグ戦であった。相手は最強のケーニッヒであった。

第1試合は、投手壇上一馬、捕手川中洋の両先輩バッテリーで始まった。第2試合で入山に突然の先発命令が出た。球速あるノーコンの効果で9回完投した。大場、入山とも力を出し切ったが、試合は負けた。しかしながら、心爽やか晴々とした楽しい一日であった。そのシーズンは8戦全敗であった。

このリーグ戦では、三田本拠の4チームは、授業ノルマの厳しい工学部の事情を考慮し、土曜日の午後小金井グラウンドでダブルヘッダーにより、春秋とも総当たり各2戦、計8試合を消化する協力的な運営をしてくれた。4チームのメンバーは、甲子園経験者を始め兵ぞろいであった。

一方、工学部メンバーは、初心者が多く珍プレー・好プレーがあったが、2年生の春リーグにて8A対7でエマノンに勝利した試合は記憶に残っている。試合経過は、8回裏の入山の単独本盗取行により負傷しながらも9回表は大場の美技もあって3人で打ち取った。

実は、本盗でひざを傷め交代を申し出たが、藤原主将から「試合には流れがある。続投せよ!」とのことで、マウンドに立ち半ば放心状態で投げた。今も「強い個に鍛え、チームプレーが完成される」

スポーツならではの教えを得たと感謝している。

3年生になると先輩から大場が主将に入山が部長に指名され、技術面では大場が運営面は入山が受け持ち互いに協力者、相談相手として責務を果すことができた。今も親交を深めている。

4年生になって、交友範囲を拡げようと東京教育大学、東京工業大学との対抗戦を始めた。

また、小金井寮の合宿、合宿最終日にOB戦・懇親会など新しい活動を入山はじめ部員全員の真摯な協力があっての賜物と感謝の念で一杯である。

今顧みると用具の調達、多磨霊園の墓地でのボール探し、解かれたボールの縫い直しを思い出し、当時はわが国の戦後からの復興に兆しがあるものの、食糧事情も充分でなく常に空腹感のなかで体力を保持しながら学業・スポーツに励んだことは、その後の人生にも計り知れない影響をもたらしたものと自負している。「銭さえあればなんでも得られる時代」ではなく、「銭もなければ物もない時代」だったのだが、野球を通じて克ち得た「競争心、向上心、屈強な心身、容儀礼節、相互信頼」を通した”絆”は、何物にも変え難いと思っている。

(15期大場克司、入山和巳記)

## 1957～1960年

1960年頃は、1年生の教養課程が日吉で、専門課程は小金井にあり、硬式野球は2年生の春休みから4年生の卒業までの3年間できた。チームは4年生が主将(実質は3年生が担当)で、部長は電気工学科の森為可教授であった。監督はいないが



1956年8月OB戦(小金井グラウンド)

大学院の入山先輩がいろいろ監督以上の面倒をみてくださった。このころは大学院に行く方は殆どおらず、就職担当の先生や研究室指導教授と相談し、行きたいところにはほぼ就職できた時代であった。

ちょうど、4年生のときにチリ地震津波災害と60年安保騒動が起きた激動の時代であったが、4年生になっても卒業設計と卒業研究(卒業論文執筆)の傍ら野球と両立させることができた。今考えると、ゆとりある時代であった。試合は春と秋に塾内リーグを各8試合行った。同リーグは、丘の上、ケーニッヒ、パトリックス、エマノンの塾内同好会チームと工学部で構成されていた。工学部との試合は小金井で行うためダブルヘッダーが原則であった。審判は他のチームの対戦のときに日吉(矢上)に行ったが、担当試合は負担を減らしていただいた。なお、欠席した講座や期末試験については先輩や同期生の手厚いフォローアップでリカバーする体制があった。

この他に、医学部と定期戦を行った。また、多摩地域の大学(一橋大、東京経済大、学芸大学、自由学園大学部)と不定期に試合をした。試合前に相手監督が上手なノックをするのを見て感心したのを覚えている。

普段の練習は概ね4時限終了時から暮れるまで、研究や設計の合間を縫って行っていた。練習帰りに武蔵小金井駅踏切際の今川焼屋によく立寄り空腹を満たして帰っていた。(当時の価格: ラーメン30円、今川焼5～10円)

合宿は春休みと夏休みに行き、1958年は小金井の北側にあった塾の学生寮に宿泊し、学校で練習した。1959年春～1960年夏は、館山(千葉県)の富士ディーゼルのグラウンドを借りて行った。

## 小金井合宿

2年生になり小金井に移って野球部に入部し、最初の合宿は夏の小金井グラウンドであった。宿泊先は学生寮で学校の近くにあり、球場まで歩いて行った。思い出に残っているのは寮のことだ。いつ倒れてもおかしくないような古い2階建ての木造建築だ。何しろ不衛生で、部屋中がかび臭く、畳は油で湿っていて、靴下があつという間に真っ

黒になるようなひどい所であった。

そして、1週間分の米を持参したことを覚えている。1958年というと終戦から13年たった当時で、まだ食糧事情は完全ではなかった。考えてみれば、当時山へ登ったとき、どここの山小屋でも、米持参は常識だったので、当然といえば当然だった。厳しい野球の練習と食糧事情の懐かしい思い出である。  
(19期日下部雅省記)

### 館山合宿

1959年、1960年は合宿を千葉県館山で行った。千葉から館山の街に入る手前、線路沿いの海側に富士ディーゼル株式会社の砂地のグラウンドがあった。線路を跨いで畑の細い道をしばらく行くと、庭の真ん中に大きな夏みかんの木がある浜田屋旅館でお世話になった。練習から帰ると夏みかんで喉を潤し、もぎたての夏みかんが甘いことをはじめて知った。

夜には富士ディーゼルの佐藤剛彦氏(東京大学が六大学史上初めて2位になった1946年のときの監督)がお見えになり、野球のお話をしてくださった。たとえば、トスバッティングではバットに当てたボールの軌道が目に残るよう集中力を持った練習が必要なことや、投手の練習量は上手投げを1とすると、横手投げは2倍、下手投げは3倍の練習でスタミナをつけることなどを話され、東大の投手陣は佐藤さんのもとで毎シーズン前に合宿練習をしていることを聞いた。

帰るときには、必ず野球部全員がディーゼル工場を見学した。見学するとグラウンド使用料を無料にしていただけるとのことで機械工学科生以外にも参加してもらった。同所は燃料噴霧ノズルの加工技術が優れていたと記憶している。宿泊は3泊4日だったと思う。

館山合宿は19期生にとって思い出一杯の楽しい場所である。

### 野球用具

木製バットは高価で、練習には孟宗竹で箱根の寄木細工のように小ブロックを積層し加工したバットを主に使っていた。バットの先端は丸みがなく、大根の首をスパッと落とした形状である。

春先や晩秋の寒いとき、打撃練習で芯を外して打つと、手がしばらく痺れた。木のバットで打ったときの響きと若干のしなりは心地良かった。重さが900~1000グラムのバットを主に使っていた。

ボールは試合では公認球だが、練習では使い古しのボールを使い、解かれたボールの縫い目を赤い糸で縫い直して使っていた。糸が切れ赤い糸が高速で回転しながら飛んでくるボールに対し、試合で使う新球は非常に軽く、普段と違うので戸惑ったことを思い出す。

小金井のグラウンドはラグビー部との併用で、左翼はラグビーのサイドラインから3mほどで多磨霊園に接し、境は垣根でその奥は草が茂り、飛び込んだボール探しが大変だった。

ヘルメットは耳当のないもので打席のみで使用し、数が不足し塁に出ると外していた。

グローブは手袋を大きくした形状のものが殆どで、クッション材(アンコ)が多く詰められており、それらを抜いて取りやすいように加工して使っていた。道具の良し悪しで技術に左右されるものではないが、やはり米国製は皮も形もスマートでボールも取り易く憧れだった。

以下は同期の丹羽君のエピソードである。

私達が使用したバットは竹製であり、竹材を1cmくらいにカットした棒を張り合わせて作ったものである。金属バットはもちろんなく、他は木製だ。木製は倍くらい高価で、しかも折れやすいので、部費で購入するものは丈夫で長持ちする竹バットであった。手がしびれて決して良いものではない。しかし、中には自費で木のバットを購入し、打っている人もいた。丹羽君がその一人だ。フリーバッティングのとき、新しく購入したバットで充分素振りをした後、バッターボックスに入った。第1球を打つと同時にグリップの部分だけを残し、大根を包丁でグサッと切ったような状態で折れ、本体はグラウンドに飛んでいった。本人は、グリップだけを持ってバッターボックスに呆然と立っていた。

選びに選んでやっと購入したもののようなだが、良い思い出です。その丹羽君、今は野球からは離れ、メキシコで優雅な生活を楽しんでいる。

(19期日下部雅省記)

## 新しいユニフォーム

1959年に試合用ユニフォームを新調した。それまでは左胸に“KEIO”とゴシック体で小さく表示していたが、新調のユニフォームは筆記体で全面に大きく“Keio”と入れた目立つデザインであった。

このユニフォーム代の未払いが約7万円あると知らされ、19期生が資金手当てをすることとなった。校内施設保全作業、審判などを行い資金稼ぎを行い、債務を完済し、決算では黒字とした。施設保全は小金井構内のペンキ塗り、金網補修や取替え作業を、審判は、企業の野球大会を探し、神宮外苑野球場で休みの日に都合の付く部員が担当し(先輩の方々にも支援いただき)、1日3~4試合行った。(当時の大卒初任給は約1.5万円であった。現在、神宮外苑には専門の審判クラブがあるが、当時は試合をするチームが審判を連れて来ていた。)(19期片野弘之、日下部雅省、斉藤孝之、中田勲記)



1957年OB戦(小金井グラウンド)



富士ディーゼル(株)グラウンドでの館山合宿

## 矢上移転前後

1971年の1年生のとき、矢上の校舎が建設中で、グラウンドも造成中だった。日吉の山から建設中の状況が手に取るように分かった。

当時練習は、毎週土曜日に小金井の工学部グラウンドで行っていた。小金井の4年生が主体のチームである。小金井では、練習以外にも日曜日に、六大学理工リーグ戦(メイン球場は駒沢球場だが)の一部や塾内リーグ戦なども行っていた。

小金井での週一の練習以外に、日吉組(1年生、2年生)でも時間を見つけて練習を行なおうということになり、日吉の校舎裏の山の中で広場を見つけてキャッチボール、トスバッティングをした。

3年生になってから完成した矢上のグラウンドを使用し練習するようになった。ライトが短いのでフリーのときにはライトの柵越え、またバックネット越えのボール拾いに苦労した。ボールがよく無くなった。バッティングケージでもあればもっと効率的に練習ができると思い、学校側に取付け



1957年秋季リーグ準優勝時のアルバム

をお願いしたが、回答は「No」である。理由は、小金井ではバッティングケージは無く、学校側でできることは、現状維持の範囲だけであった。

工学部が矢上に移っても、小金井のグラウンドはまだまだ現役で、試合によく使用した。OB 戦はいつも小金井で行った。昼食時 OB 各位と食べた出前のかつ井、高円寺で行った懇親会が楽しい思い出である。

小金井はレフトが短いため柵越えの多磨霊園で線香の匂いの中、蚊と格闘してボール探しをした。矢上と小金井のグラウンドは外野の広さがまったく逆だった。

ところで、特徴があるグラウンドといえば東小金井にある法大工学部のグラウンドだ。公式戦でよく使用した。このグラウンドの特徴はセンターが短く、センターの柵越えは二塁打である。

1 年生のとき、小金井には工学部の学生寮があり 4 年生の先輩が寮生ということもあり、練習後よく先輩たちと学生寮にお邪魔した。また小金井での合宿のときには泊まらせて頂いた。

先輩諸氏には大変お世話になった。

(33 期吉川徹記)

## OB 会

当時、野球部 OB が 300 名を超える中で OB 会組織は無かった。有志が手元に有った名簿の過半数の方のご賛同を得て、1997 年 11 月 15 日 OB 戦終了後、第 1 回 OB 総会を開催し、OB 会を結成した。以後、年 2 回の OB 戦を実施し、秋の OB 戦終了後、総会を開催し、現役とのコミュニケーションを図っている。OB 会員からの年会費収入により、野球用具の購入などの現役活動支援、OB 会員への OB 戦開催案内などの情報提供活動を行っている。OB 戦での思い出もある。

### 古手 OB が御揃いのユニフォーム着用

今から 10 年ほど前の 2002 年頃、OB 戦の後の懇親会で、長老達だけで現役と同じユニフォームを作ろうということになった。

もちろん希望者だけが、当時 OB 戦に出場していた最高齢塩川さんから 25 期くらいまで、約

20 人分のユニフォームを作った。当時、60 歳以上位のメンバー対象だった。

出席率の高い人は、年 2 回の OB 戦があるので結構着用していることになる。我々の時代、東京六大学のユニフォームと同じものを着用できるなど思ってもいなかったので、その喜びもひとしおであった。北海道からも購入の希望が届いた。

高齢化等により出席できなくなった人、地方にいて参加が難しい人等がいて全員でカメラに収めることは不可能となってしまったが、懇親会の席で出た提案を直ちに実行したことが、よい思い出につながっていると喜んでいる。

(19 期日下部雅省記)



2000 年 11 月 OB 総会・懇親会



2001 年 11 月 OB 戦(塾高グラウンド)



2003 年 11 月 OB 戦(多摩川河川敷グラウンド)

## 現役の活動状況

現在は矢上グラウンドで毎週水曜と土曜の2回行われる全体練習と月2回程度の六大学相手の遠征試合を軸に活動している。それに加え、参加者を募って自主的に1限の授業が始まる前に朝練を行う部員がいたり、日吉キャンパス内のトレーニング施設を用いてウエイトトレーニングを行う部員がいたりなど、非常に意欲的な選手が多く集まっている。部員には、慶應の体育会野球部を辞めて入部する者、高校野球で経験した悔しい思いを大学野球で晴らすために入部する者もいれば、大学から野球を始めるまったくの野球未経験者などもおり、「真面目にかつ楽しく野球をする」というチームのコンセプトのもとで異なる境遇の部員がチームの勝利という同じ目標を持って共に活動している。

試合は、各大学相手に3試合、年間計15試合行われる理工系東京六大学リーグと、毎年10月または11月頃、3年生の引退間際にリーグ戦とは別に行われるトーナメント方式で優勝を争うZETT杯とがあり、これらに勝つために選手は日々汗を流している。このうち、リーグ戦の1試合は六大学で深夜の東京ドームを貸し切って行われており、これは理工学部体育会硬式野球部の毎年の恒例行事となっている。近年の六大学リーグで毎年慶應野球部は優勝争いには加わるものの優勝を逃してきたが、2012年のリーグ戦では通算12勝3敗という成績で久しく果たしていなかったリーグ優勝を成し遂げた。

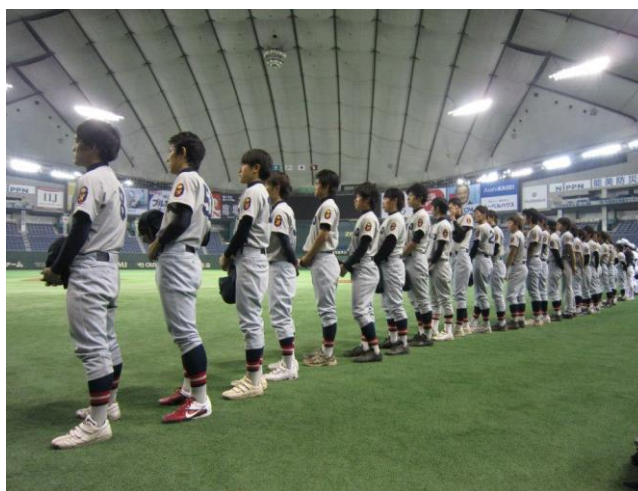
そのほかの主な年間行事としては、年2回、春と夏の長期休暇を利用して行われる合宿や、OBの方々との交流を目的としたOB戦・OB総会などがある。また各大学間の交流を深める意味を込めた六大学合同のイベントとして新歓花見会や懇親会が行われ、加えて今年度は各大学の同学年の選手を1つのチームにまとめた学年対抗試合なるものが行われたこともあって、例年になく大学間の交流が活発になっている。

長い歴史を持った理工学部体育会硬式野球部および理工系東京六大学野球だが、ZETT杯に金属バットではなく木バットを導入する、試合をビ

デオに収め動画投稿サイトYouTubeに載せる、先に挙げた学年対抗試合を行うなどの新たな試みも各大学の理事が中心となって行われており、より良い運営が目指されている。

2012年度のリーグ戦試合結果は以下のとおりである。

	KEIO	TOKYO	HOSEI	Meiji	RIKKIO	WASEDA	勝	敗	分	勝率
KEIO		○12-4 ○15-0 ○12-5	○11-4 ○11-10 ○8-2	●3-18 ○11-4 ●7-11	○10-9 ○14-5 ○8-0	○12-5 ○10-4 ●4-5	12	3	0	0.800
TOKYO	●4-12 ●0-15 ●5-12		●2-6 ●2-9 ●7-10	●9-17 ●6-7 ●5-14	○11-1 ○12-8 ○5-3	●4-14 ●1-23 ●0-11	3	12	0	0.200
HOSEI	●4-11 ●10-11 ●2-6	○6-2 ○9-2 ○10-7		○7-6 ○11-10 ○9-5	○13-4 ○14-13 不戦勝	●3-7 ○4-3 △4-4	10	4	1	0.667
Meiji	○18-3 ●4-11 ○11-7	○17-9 ○7-6 ○14-5	●6-7 ●10-11 ●5-9		○11-1 △2-2 ○6-0	○9-8 ●3-4 ●2-3	8	6	1	0.533
RIKKIO	●9-10 ●5-14 ●0-8	●1-11 ●8-12 ●3-5	●4-13 ●13-14 不戦敗	●1-11 △2-2 ●0-6		●3-18 ●3-13 ●3-14	0	14	1	0.000
WASEDA	●5-12 ●4-10 ○5-4	○14-4 ○23-1 ○11-0	○7-3 ●3-4 △4-4	●8-9 ○4-3 ○3-2	○18-3 ○13-3 ○14-3		10	4	1	0.667



2012年6月9日東京ドームにてリーグ戦開催





2012年9月夏合宿（山形県天童市）



2012年11月21日リーグ戦優勝決定戦 vs 法政  
(朝霞市民球場)



2013年6月1日矢上グラウンドでの練習

慶應大学理工学部体育会硬式野球部年史

西暦	部長	主将	戦績		トピックス
			春季	秋季	
1939					・1期生有志による創部準備開始
1940		山本 敏			・藤原工大野球部創設 ・新丸子王子製紙球場借用開始、慶應日球場でも時々合同練習実施 ・ユニフォームのマークは「F I T」 (Fujihara Institute of Technology) ・3月小田原市営球場にて合宿(1W)。慶應大学野球部に指導いただく。 ・6月の戦績資料あり
1941	鯨島盛一郎	山本 敏			
1942	鯨島盛一郎				
1943	鯨島盛一郎	高崎 武章			・戦時下の政策により休止状態となる。
1944					
1945					
1946					
1947		吉田 純一			
1948		大野 一雄			
1949		大野 一雄			
1950		坪井 泰博			・昭和25年度秋季塾内対抗四クラブリーグ戦第3位 ・エマノン創部。塾内リーグに参戦。
1951		大野 宏	優勝		・小金井合宿 ・クラス対抗野球大会開催(1971年まで継続)
1952		岩田 治			
1953		荒木 茂生			
1954		壇上 一馬			
1955	入山 和己	大場 克司			・夏休みに10日間の合宿。小金井寮に宿泊。 ・東京教育大学(現筑波大学)、東京工業大学との対外試合実施。 ・OB戦実施、試合後教室でかつ井で懇親会。
1956	森 為可	榊原 章正			
1957	森 為可	小山 滋	準優勝		
1958	森 為可	福井 敏雄			
1959	森 為可	堀内 俊一			・ユニフォーム新調(筆記体Keio)
1960	森 為可	関野 正明			・4年生も野球を継続実施
1961	森 為可	古館 邦生			
1962	森 為可	大津 基一			
1963	森 為可	宮崎 吾郎			・東京六大学理工系リーグ設立、第一回創立記念試合(4大学)開催 共催：日刊工業新聞社 後援：日立金属㈱
1964	森 為可	寺西 三郎	6大学：優勝 塾内リーグ：優勝		・東京六大学理工系野球連盟創設。(共催に日刊工業新聞社、後援に日立金属㈱を 迎え、春秋各10試合、計20試合のリーグ戦を行う)
1965	森 為可	福島 一郎	優勝	優勝	・塾内リーグではケーニッヒに勝てず
1966	森 為可	若松 幹人			
1967	森 為可	柏木 哲男	優勝	優勝	
1968	森 為可	澤田 清	優勝	優勝	
1969	森 為可	多田 昭郎	4位	3位	
1970		松丸 心一	4位	5位	
1971		前田 一郎	5位	3位	
1972		前田 一郎	3位	優勝	
1973		吉川 徹	3位	3位	
1974	竹内 寿	吉川 徹	3位	4位	
1975	竹内 寿	五十嵐和幸	2位	3位	
1976		坂本 修一	2位	3位	
1977		加藤 欣一	2位	5位	
1978		藤室範比登	5位	2位	
1979	角替 利男	黒田 悦幸	優勝	2位	
1980		鈴木 敏夫	優勝	優勝	
1981		赤田 英明	優勝		
1982		松島 栄次			
1983		奥野 広良			
1984	佐々木敬介	佐藤 文博	優勝	2位	・春季優勝は7勝3敗3校同率 ・各校5名選抜で3校vs3校合同オールスター戦開催(駒沢球場) ・秋に1・2年生による新人戦実施
1985	佐々木敬介	足立 秀人			・秋に品川プリンスホテルにてOB総会開催
1986	佐々木敬介	工藤 徹		2位	
1987	佐々木敬介	恒川 幸弘	2位	2位	
1988	佐々木敬介	成瀬 泰道	2位		
1989		川島 孝之	新人戦準優勝		
1990		板谷 義彦	優勝	2位	
1991		中野 裕二			
1992		村上 直樹			
1993		森 教輔			
1994		芦田 英史			
1995		古谷 昌信	優勝	2位	
1996		古谷 一郎			
1997		河野 通正	優勝		・平成9年11月15日第1回OB総会開催。OB会結成
1998		大石 秀伸	2位	2位	・春：秋東京ドームでの開幕戦実施
1999		豊田 崇雄			・春：西武ドーム、秋：東京ドームで開幕戦実施
2000		岡野 伸哉	優勝	2位	・秋：東京ドーム開幕戦実施 ・第一回矢上祭開催 ・OB会ホームページ立ち上げ ・日刊工業支援あり
2001		川上 弘記			
2002		丹羽 雅裕			
2003		川中 真			
2004		石野 雄吾			
2005		空花 俊人			
2006		松崎 洋平	4位	3位	
2007		佐藤 啓明			
2008		平島 裕			
2009		嶋村 昌士			
2010		加藤 俊輔			・クライマックスシリーズを開催
2011		田中 淳訓	ZETT杯優勝		・ZETT杯は10月～11月に行うトナント戦
2012	松林 伸生	加藤 理志	リーグ戦優勝		・六大学合同学年対抗試合を実施。各大学の理事の活動により大学間交流の新たな試みが行われるようになった。
2013	松林 伸生	緒方 大樹	リーグ戦3位		・7月東京ドーム開催(vs立教、3対0で勝利) ・ZETT杯一回戦敗退

